



# 卓 話

コミュニケーションをとったり、千代紙などを短冊状に切って、ひらがなで名前を書いてあげたりなど積極的に友人をつくりました。授業は全てドイツ語で大変でしたが、友人達が本当に親切に助けてくれました。

## 「帰国報告」

青少年交換派遣学生 青野 路子氏

今回は報告の機会を設けていただき、誠にありがとうございました。

私が出発したのは2005年8月14日のとても暑い日でした。前日まで一人で飛行機に乗れるかなどとても不安だったのですが、向山さんをはじめ多くのロータリーの方々に見送られ、勇気づけられて出発いたしました。ドイツの空港では第一ホストファミリーであるヴェンナー一家が迎えてくれ、その家族が住んでいるデュッセルドルフという大きな町から電車で乗り継いで二時間ほどのマールという町へ行きました。畑に囲まれ、牛や馬などが放牧されているのどこか美しいところでした。ヴェンナー一家はホストファザーが眼鏡屋を営み、奥さんがその手伝いをしている家で、子供は16歳、14歳のホストブラザーと9歳のホストシスターがいました。



留学当初の問題はやはりドイツ語が難しかったことです。留学する前に3ヶ月ほどドイツ語の勉強をしましたが、ごく基本的な会話しか勉強できませんでした。それでもドイツ人は英語が得意というイメージを勝手に持っていて、英語が使えれば何とかかなると思っていたのですが、第1ホストファミリーは殆ど英語で話すことがなかったので、最初からドイツ語使わなくてはならない状況に置かれて大変苦労しました。しかし、今思うとそうした環境が自分のドイツ語の上達にとって良かったのではないかと思います。

マールではゲシュヴィスター・ショール・ギムナジウムというとても綺麗な学校に通いました。私はホストファミリーの一番上の子と同じ学年で、日本でいう高校一年生のクラスに入ることになりました。友人ができるか大変心配だったのですが、最初の日から声をかけてくれたクラスメートとすぐに仲良くなりました。私も電子辞書などを利用してコ

最初の3ヶ月を第1ホストファミリーと過ごし、次第にドイツ語も使えるようになった頃、次のホストファミリーであるオペッツ一家のもとに移りました。その一家もマールに住んでおり、車の販売会社で働くホストファザーと専業主婦のホストマザー、そして21才、20才のホストシスターが2人いる家庭でした。シスターは2人とも私より年上でしたが、20才のホストシスターはデュッセルドルフの大学で日本語を専攻していたこともあり、家族全員が日本にとっても興味を持ってくれていたので私には大変過ごしやすいファミリーでした。特にこのホストマザーは母性愛に満ちた人で、私を本当の子供のように扱ってくれて、このドイツ留学においてかけがえのない人となりました。今でもこのファミリーとはメールなどで親密に交流していますし、又ドイツに行った時には是非訪ねてみようと思っています。

第2ホストファミリーから第3ホストファミリーに移る時、留学の1つの転機が訪れました。第3、第4ホストファミリーはマールではなく、それまで通っていた学校へ通にくいレクリングハウゼンという町に住んでいたのです。カウンセラーの方が学校を変えることを提案してくれたのですが、私はマールの学校にとっても馴染んでいたのととても悩みました。しかし私のドイツ留学でやるべきことの1つに、日本への理解を広めることがありました。そのため新しいレクリングハウゼンの学校で日本を紹介したいという思いと、転校して新しい友人を作りたいという気持から転校することに決めました。

新しい学校はペトリーノム・ギムナジウムという大変伝統のある学校でしたが、転校の時期が2月という冬の時期ということもあり、学校全体があまりアクティブではありませんでした。わたしもそうした中でつい積極的に交流することができなく、最初の1カ月くらいは家にこもりがちで過ごしにくい日が続きました。しかしこのままではいけないと、友人を招待して日本食をごちそうするなどして自分から積

極的に働きかけていくうちに、次第に友人との仲も深まっていき、生活も充実していきました。第3ホストファミリーはホストファザーが眼科医で同じ学校に通う19才のホストブラザーと14才のホストシスターがいる裕福な家庭でした。私にはとても親切にしてくれましたが、この第3ホストファミリーとは一緒に何かするという感じではなく、自分としては少々関係が希薄だったと残念に思っています。

私は結局4つのホストファミリーをまわったのですが、第4ホストファミリーのホストファザーは私の父と同じ弁護士でとても親近感があり、さらに同じ学校に通っている同じ年のホストブラザーがいたため、共通のクラスの話などがあって、この家でも大変楽しく過ごしました。また、年下の14才、9才のホストシスターがいたのですが、14才の子は年齢の割に大人っぽく、自分の考えをしっかりと持っていて色々な面で触発されました。このホストファミリーと一緒に過ごした期間は最後の1カ月でしたが、ヨットに連れていってくれたり、バーベキューをしたりととてもアクティブな経験をさせてもらいました。

私の地区ではローテックスといって、以前留学をした人達が2ヶ月に一回、留学生を集めてキャンプやカヌー、クリスマスなど色々なイベントを主催してくれます。私の地区では40〜50人ほど留学生が在籍していて、ロシアやラトビアの方もいましたが、大半がアメリカ、カナダ、アルゼンチン、メキシコなどのアメリカ大陸方面から来ている学生でした。アジアから来た留学生は私一人だけだったので、英語圏の人達が母国語をしゃべるのがうらやましく、少し疎外感を持ったこともありました。けれども私が日本から来ている唯一の学生ということで色々な面で気を使ってくれ、今では本当にいい仲間達に巡り会えたと思っています。

この集会以外の大きな催し物にドイツ一周旅行とヨーロッパ一周旅行がありました。このドイツ一周旅

行はベルリン、ハンブルクなどの主要都市をまわります。どの町も素朴でありながら威厳がある美しい町でした。特に時代によって様式が違うお城や、美しいけれど生活や思想にとっても影響のある教会を見物できたのは、ドイツ留学をさせてもらった醍醐味であったと思います。

このドイツ旅行で留学中最も経験すべきことの1つであったダッハウの強制収容所の見学をしました。ドイツ留学をしたからには楽しいことだけを体験するだけではなく、ドイツの負の歴史も学び、平和について考えなくてはならないのだと心から思いました。そのダッハウの強制収容所は大変悲惨な所で、展示が細かく、リアルで目を覆いたくなるようなものばかりでしたが、このような現実を受け入れ、同じ過ちを繰り返さないためにはどうしたらよいのかと考えられたことはとてもよかったと思っています。

ヨーロッパ旅行は三週間あり、チェコ、ハンガリー、フランス、イタリアなどのヨーロッパ各地域を巡りました。ドイツだけではなくヨーロッパの各国は色々なカラーを持っているのだということを知り、また仲間達とも大変楽しく過ごすことができ最高の思い出となりました。

この留学でたくさんのことを学びましたが、私がその中で一番大切だと思ったのは協調性の大切さです。これをなくしては平和について考えることもできませんし、私達の生活を豊かにすることもできないことを知りました。この留学で学んだ協調性を大切にしてくれからの人生を歩んでいきたいと思っています。

最後にこの留学をさせていただいたことは本当に私の人生の中で大切な宝物となりました。多くの方に支えられて無事留学を終えることができ、感謝しても感謝しきれないのですが、この場をお借りしてあらためて御礼を申し上げます。